

21世紀の人々の暮らし

—オプティミストの描く未来像—

三井加寿恵

1. はじめに

ただいま 2002 年、11 月現在、21 世紀に入っの 2 年目もそろそろ年末に近く、やがて 2003 年を迎える。

今振り返る 20 世紀は、良くも悪くも強烈な時代であったと思う。筆者の人生のほとんどをどっぷりつけて生きてきた、ほかならぬ愛しの 20 世紀である。それへの愛惜はつきぬものの、今は 21 世紀という未来への展望へと、頭を切り替えて、この拙稿をすすめようと思う。

このところの国内の政治、経済、そして国際関係のありようなどが、非常な速度で、しかも今までに無い現象で変わりつつあるのを実感しているせいであろうか。現実の社会や生活が、どんどん 20 世紀から遠去かっているような気がしている。

その変わり方の方向性も、かなり明瞭な輪郭で私たちに見えてきているようである。筆者がおぼろげながら描いていた 21 世紀の人々の生き方は、地球上のすべての生物を含めて、多分精神性を大事にするものによっていくのではないか、というものであったが、その予測がかなりはっきりした形をとって、人々の生き方や考え方に現れてきたように思う。時代は変わってきたようだ。現在の現象としては、“混沌”とした社会状勢だが、すこしずつ変わっていくに違いない。多分、好ましい形で変わっていくような気がする。

現状ではしかし、不況からの脱出はほど遠いように見える。モノ造り、技術革新において世界のトップにまで登り詰めた日本が、動きの取れないフリーズ状態に入って久しい。経済の冷え込みはリストラによる失業者や大学卒フリータの増加などの社会現象を引き起こしている。東京、大阪などの目につく所に多数のホームレスの姿が見られ、しかも、若いホームレスが目立つという。これは非常にショッキングな現象ではないだろうか。現状ではこう

した落ち込みにこれぞという対策もなされていないように見える。

世界的にみても、21世紀に突入して早々に起きたあの衝撃的な同時多発テロ事件が人々の意識を変え始めたように感じる。人々が、核やテロの脅威のない、平和で静かなそれぞれの生活が営める世の中を求めているのがひしひしと伝わってくる。多分、繁栄よりも静かな平和を、ささやかながら穏やかで普通の生活を、人々は指向しているに違いない。1年目を迎えたこの9.11に、事件現場“グラウンド・ゼロ”に集う人々の、声にはならない深い鎮魂の表情がなによりも強く、そうした平和への願いを物語っていた。

今感じる“ムード”は、いわば“ハードからソフト”へ、心を大切にして生きていきたいとそろそろ人々が考え始めており、それを言葉や行動で表し始めている、ということである。例えば、身近に目に触れるところで、“地球にやさしい”、“人にやさしい”、“癒し”などのキーワードがTVのコマーシャルを始めさまざまな所で使われている。また例えば書店の棚に並ぶ本の書名などでも、“がんばらない”という、柔らかな表現が目につく。

世界の平和を求めて活動している民間のネットワークが広がり、世界のどこかで事件が起こると、若い人達が積極的に救援に参加する、その姿を見ると、これからの世界の平和への希望を信じてよいような気がする。かつて“エコノミック・アニマル”と悪名の高かった日本も、他国に対して経済援助や技術援助をするようになり、国際社会での存在感を強めてきたのは嬉しいことである。高い業績を挙げた企業が、利益の一部を社会に還元し始めているというのも、ほっとする情報である。

この“混沌”として先の読めないように見える21世紀の始まりが、これからどのように進展していくのか、非常に強い関心を持たざるを得ない。そこで、この拙稿で筆者なりの21世紀のイメージを描いてみたいと思う。希望的なイメージを描いて、できればその先行きの確かな方向を生きて見届けたい気がしてならない。

2. 古い体制が壊れ始めた

21世紀に足を踏み入れた途端に、様々な事件が国内外で起きた。すでに前世紀から続発していた大企業の倒産、合併、その他の諸々の事件が、日常茶飯事のように報道され、我々は少々のことではもはや驚かなくなってしまう感じがある。そうした様々な現象は、古い体制から新しいものへ移行する際の産みの苦しみであったり、長年内臓していた“膿”のようなものかもしれない。密室の中に閉ざされていたものが、国民の前に情報公開され、批

判や評価の対象となることは、非常に好ましいことに違いない。

例えば、外務省の一連の事件がある。国民からとても遠い存在であった政治の世界が、茶の間話題として身近なものになった一つの例である。国民がなんとなくうさん臭く感じていても、どうせ本当のことは知り得ないのだと、遠ざかっていた政治の世界に、田中真紀子さんによって、ともかく風穴が開けられたのである。これは女性の、あのキャラクターなればこそできたことではないだろうか。以前は政治に絶望し、関心がなかった人達も、かなり強い関心を持ち、テレビのインタビューでも、どんどん意見や感想を述べるようになった。このような形で国民が政治に参加する、これは大きな進歩だと思う。

政治に関心をもつといえば、9月に行われた長野県の県知事選挙で、話題の田中康夫さんが圧勝したという快挙が思い出される。県議会の古い体質が長野県民の民意によってはっきり拒否されたといってもよいであろう。これからは“民意”を無視してはやっていけないという、一つの先例を作ったといえよう。

“民意”がしっかり政治に影響することが、仮に、最悪の例としてどこかの国に同調して、戦争に巻き込まれるような事態になった場合の歯止めとして非常に大事なことなのではないだろうか。憲法改正など、きな臭い動きが現にある。戦争を知らない世代が中心になっていくこれから、戦争がいかにか呪わしいものか、いかにか愚かしいものか、そしていかにか悲しくも低次元のものか、若い人々に知っておいてもらいたいと思う。そしてまさかの時には、“民意”をもって阻止してもらいたいと強く思う。

3. 人々の暮らしにみる意識の変化

(1) シンプルライフ指向

20世紀の人々の大きな目標であった「モノとカネ」への希求、物質的豊かさへの憧れが、一通り満たされ、それなりに一応の満足のいく衣食住の上に生活できるようになった。「モノ」は消費者を待って街に溢れているものの、不況のせいで賢く財布の紐を締めている消費者はやたらに買い込まなくなった気がする。人々は“シンプル・ライフ”指向で、すっきり、身軽に生活したいと思い始めているようだ。

(2) 国民総健康指向

日本の長寿の記録が年々更新され、世界のトップを占めるいま、人々の関心は“健康指向”にまっしぐら、の感じがある。健康に関するテレビの番組

がひしめき、かなりの視聴率を挙げているようである。

(3) 食品表示に厳しいチェック

狂牛病の恐怖に端を発した牛乳・食肉の偽装問題以来、人々は食品や添加物の表示に強い関心をもっている。食品の表示に怪しさを感じると、人々は敏感にそうした食品を排除するようになってきた。確かなもの、本物しか口にしないという姿勢を、とくに若者たちに身に付けてもらいたいものである。

安心して口にいれられる食品を選び、健康に留意した料理をつくり、そうした食事を撮ることは、自分の健康はもちろん、いずれは愛する家族の健康を守らなければならない若い人たちにとって、とても大切なことなのである。現在長寿を誇っている日本の、長寿の方たちは明治や大正時代生まれの方なのであって、これからもずっとそうであるとは限らないのである。子やその子たちが、いつまでも健康に、幸せに生きていけるようにと心から願わずにはいられない。

(4) 農薬など石油化学系のものに対する拒否反応

農薬使用の野菜など、できるだけ口にしたくないと人々は考えている。割高であっても有機野菜を求め、中には自分で田舎に土地を求めて野菜を育てる人も増えた。白米一辺倒の食生活から、玄米や穀類へと変えている人が増え、世界一の長寿国の和食は理想的な健康食として外国の人達に大人気とのことである。

(5) 近代医療への不信から自己防衛をする人々

近代医療も進歩しているのだろうけれど、度重なる医療ミスへの恐怖や、石油化学系の治療薬による副作用、院内感染などで、近代医療に拒絶反応をもつ人が多いと思われる。ちまたでは漢方薬や指圧、はり治療なども人気で、気功やヨガなど自然からの治癒力に頼る人も多い。速効性はなくとも、ゆっくり時間をかけて、納得のいくやり方で人々は自分の健康を守ろうとしているかに見える。今、若者に人気の高い「足の裏マッサージ」や「エステ」、アロマを部屋の中に充満させて心身を癒す「アロマセラピー」も、そうした自己治療の一種であろう。パソコンがオフィスワークの中心的ツールである今、ストレスをいかにうまく捨てていくかが健康を守る大事なポイントなのである。

人間の体を内部から錆びつかせて老化を促進させるだけでなく、癌などに罹りやすくするという活性酸素対策として、マイナスイオンを発生させる電気器具が売れ、同じ効果をもつ炭素を発生させるという「炭」を部屋に置く

のも流行っている。なんとも健気に人々は賢明に自己防衛に励んでいるのである。

(6) 工場排水や電子力発電からの汚染問題に自己防衛する人々

この夏の異常な猛暑はついこの間のことであった。年々夏の気温が高くなる地球温暖化や秋口の欧州諸国の豪雨などは、20世紀から人類がせっせと行ってきた環境破壊のつけであるらしい。かつてないスピードで環境破壊が進み、例えば放射線の多用が世界中で癌を発生させている一つの要因であるといわれている。

人々はエコロジーに関心をもつようになり、危ない水に不安感をもち、多くの人々が家族の健康を守るためにミネラルを含んだ天然水を求めて高い代金を家計から捻出しているのも事実である。あるいはポリ容器で安全でおいしい水を遠くまで車で汲みにいくのを日課としている人もいる。

このような社会現象を挙げていくと、まだまだ話題は尽きない。今まで述べたことは、人々がとっくに認識していることのほんの一部に過ぎないのである。21世紀は“自己責任の時代”になるという認識が必要であろうと学生に話したことがあるが、実際人々は、実に忍耐強く自己責任で自己管理していると思わざるをえない。自分の家族は、健康は、今のところ自分で守るしかないようである。日本の国が、いつかちゃんと国民を守る施策を考えてくれるように、しっかり見守っていきたいものである。

4. 21世紀はどんな時代になるのだろうか

さて、21世紀はまだ始まったばかりである。この新しい世紀はどのような方向に向かおうとしているのだろうか。人々の暮らしはどの様な暮らしになっていくのであろうか。

クライアントの多さで世界トップといわれ、講演会に企業などの経営トップが詰めかけるといわれる(株)船井総研の会長である船井幸雄氏の最近の著書から、幾つかのキーワードを借りて、これからの世の中の動き、方向を探ってみたい。

筆者が船井幸雄氏の著書を読んだり、テープを聞いたりして数年になる。経営の神様といわれるこの人に最初に惹かれたのは、「人は単純になるほど上等になる」とか、「効率のよさは思いやりから生まれる」などのフレーズとともに、成功している経営者について述べている箇所に強く共感したからである。それは、成功する経営者には、豪快でおおざっぱなイメージが

強いが、実は人が気がつかないところで、細かく気を遣っている人が多い。そういう要素をもったうえで、大胆になれるから成功するのだと述べている箇所であった。

例えば、ある会社の社長はどんな訪問者でも自分が面会した人を自分で玄関まで見送る習慣を持っている。そうした経営者がいる企業では会社規模に関係なく、経営がうまくいっていると述べている。

この人の基本的姿勢が伺われるエピソードであり、時代の先を読むこの人の見識に始めの内は素直についていけなかった筆者も、こうした基本姿勢をもつ船井氏ゆえに自然に納得させられるようになった。

2002年10月に初版が発行された船井氏の著書『トリプル・トレンドから見た5年後』は、現社長である小山政彦氏との対話の形で進められている。この中でこれからは「本物主義の時代になる」という項目がある。氏は最近の他の著書で、「資本主義の崩壊がはじまっている」という説をたてているが、「資本主義に代わって本物主義になる」といい、本物あるいは本物主義の時代になると書いている。今の資本主義からどう変わるかというと、

- ・「グローバル化からローカル化へ」
- ・「エコノミーからエコロジーへ」
- ・「競争から協調へ」
- ・「秘密から公開へ」
- ・「分離から融合へ」
- ・「浪費から節約へ」
- ・「独占から公平へ」
- ・「束縛から自由へ」
- ・「複雑から単純へ」

以上、非常に分かりやすいキーワードで示している。これは、人間が本来あるべき姿になっていく、ということであり、人間が自然の摂理や良心に従う生き方をするようになるということである。そうすると、それに応じて世の中のすべてのシステムも、そういう生き方にふさわしいものになってしまうことになる、船井氏は書いている。

本物技術は自然にやさしいものであり、自然を破壊しないものになる。例えば、デュポン社が開発したバイオ繊維はトウモロコシから作られ、ナイロンやポリエステルより強くて綺麗で、しかも安い。この繊維3TGで作った衣料は、飽きて着なくなったら、地面に埋めると自然に還って肥料になる

という。そのほかにも、走れば走るだけ空気が綺麗になるエコロジーカーなど、夢のような話しが書かれている。公害のないきれいな社会が実現しそうな期待がもてる気がする。

5. おわりに

この拙稿に一オプティミストの描く未来像—と副題をつけたが、そんなに簡単に理想的な未来の暮らしが実現するはずがない、と大方の人は考えるかもしれない。いや、現在の混沌とした社会状況にあっては、そのほうが当然であろう。

しかし、時代は確実に変わっていくと考える人も多いはずである。それも望ましい方向へと、希望的予測をする人も多いと思う。船井氏いわく、「都合の悪いことは考えないでおこう」であり、「すべてうまくいく、とプラス思考で物ごとに当たる人がおおむねうまくいく」と。

最後に、筆者が大好きなC. チャップリンの言葉、「人には some money があればよい」を挙げてこの稿を終えたいと思う。「黄金狂時代」を始め、資本主義の時代を、そして時の独裁者を痛烈に批判した映画を作り、平和へのメッセージを映画に託したチャールズ・チャップリン。社会の下積みの弱い人々に限りない愛情をそそいだ多くの映画を世に送り出したチャールズ・チャップリンのこの言葉で終りにしたいと考えていた筆者の驚いたことに、前述した船井氏との対談の相手である小山氏が、「チャールズ・チャップリンが言っていたように、『幸せになるためには、ちょっぴりのお金と大きな夢があればいい』のだと思います。コレ、名言です」と対談の終りの部分で書いているではないか。あまりの符合に驚かされたが、オプティミスト同志（僭越な言い方で恐縮ながら）の自然の成り行きかもと深く納得したのであった。

参考資料

- ・船井幸男著『これから10年 生き方の発見』2000年8月1日 初版発行（サンマーク文庫）
- ・船井幸男・小山政彦共著『トリプル・トレンドから見た5年後』2002年10月4日 1刷発行（株式会社 ビジネス社）